

シリーズ「遺跡を学ぶ」

145

琉球王国の 象徴

首里城

當眞嗣一

新泉社



琉球文化の シンボル

―首里城―

當真嗣一

【目次】

第1章 首里城をとり戻せ

- 1 沖繩戦と首里城
- 2 首里城の復元
- 3 よみがえる首里城

第2章 グスクの時代

- 1 先史時代の琉球
- 2 グスクの誕生
- 3 大交易時代
- 4 グスク時代の発展
- 5 三国分立から統一へ

第3章 琉球王国の象徴・首里城

- 1 首里城を鳥瞰する
- 2 正殿の発掘
- 3 正殿の遺物
- 4 北殿と南殿
- 5 京の内
- 6 精巧優美な石垣

第4章 琉球王国の終焉と首里城

- 1 琉球王国の終焉
- 2 世界遺産になった首里城とグスク群
- 3 焼失とこれから

参考文献

編集委員

勅使河原彰（代表）

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

正殿をはじめ城内および周辺の貴重な文化遺産が失われた。


一九四一年（昭和一九）二月八日、ハワイの真珠湾攻撃によって太平洋戦争がはじめられた。開戦当初、破竹の勢いで進撃をつづけていた日本軍は、一九四二年（昭和一九）六月のミッドウェー海戦を境にして太平洋の戦局は逆転した。戦況が悪化してきた一九四四年（昭和一九）三月、南西諸島の防衛を目的に第三二



図1・復元首里城（首里城公園）
西側上空から、復元された正殿・北殿・南殿などの建物群と曲線を描く城壁を望む。手前右のこんもりとした緑は、城内でもっとも神聖な空間「京の内」。

第1章 首里城をとり戻せ

1 沖縄戦と首里城

古都首里は丘の上にある。その南縁部の頂に鎮座しているのが首里城だ（1）。平成の復元をへてよみがえった朱塗りの建物と白色のうねる石垣が南国の空に映え、夜ともなるとライトアップで幻想的な景観をみせてくれる美しい城であった。

首里城は、五百有余年にわたって存続し、琉球王国の政治・経済・文化・外交の中心的役割をはたしてきた城であった。また、琉球の築城や土木・建築技術の粋を集めて築城された沖縄を代表する城でもあった。日本をはじめとして中国、朝鮮、東南アジア諸国との交流を深めるなかで優れた文化を創り上げてきた琉球王国。その拠点であった首里城は華やかな王朝絵巻の象徴として今次大戦の直前まで首里の高台でその威容を誇っていた。

しかしながら、太平洋戦争末期の沖縄戦では、一帯がもっとも激烈な戦場となるにおよんで

月以上にもおよぶ「鉄の暴風」が吹き荒れた。そのため二十数万、という尊い人命が犠牲になり、県民の財産もことごとく奪われた。同時に過去から継承されてきた数多くの貴重な文化遺産も消失することになった。

とくに首里城跡の地下深く第三二軍の総司令部が置かれたこともあって、文化遺産の集中する首里の町は米軍の猛攻撃にさらされることになった。首里城の地上部分の国宝建造物や神社仏閣および石垣や赤瓦がよく保存されていた首里の町並みなど、貴重な文化遺産の数々が破壊されてしまった(図2)。また、一九五〇年に首里城跡に琉球大学が設置され、校内所狭しと校舎が建設された(図3)。そのため、戦禍をくぐり抜けてきた城壁の一部も、大学の設置建設工事によってさらに壊されてしまった。



図3 ● 開学当初の琉球大学本館ビルと構内
現在の首里城奉神門前の下の御庭(うなー)方面より撮影された琉球大学2階建ての本館。首里城正殿は本館前の駐車場地下で検出された。

軍が創設された。

こうしてはじまった太平洋戦争末期の沖縄戦は、日米両軍の最後・最大の戦闘であり、激しい国内地上戦であった。沖縄県教育委員会編による『高校生のための 沖縄の歴史』は、沖縄戦の特徴としてつぎの四点をあげている。

一つには勝ち目のない捨て石作戦であり、本土防衛と国体(天皇制)護持のための時間稼ぎの戦闘であったこと。二つには一般住民を巻き込んだ地上戦がおこなわれたために、軍人よりも民間人の被害が多かったこと。三つには軍事物資も兵力も国民を総動員して供給するという国家総動員体制地方版として戦われたこと。四つには住民が信頼していた日本軍による住民殺害事件が多発したこと。

このように総括される沖縄戦では、三カ



図2 ● 沖縄戦で破壊された首里城と首里の町並み
手前の石垣は首里城跡の城壁、右が円鑑池(えんかんち)で左が龍潭(りゅうたん)。龍潭の北に接していた琉球国王世子邸中城御殿(なかぐすくうどうん)の建物群も焼け落ち、みるかげもなく破壊しつくされた首里の町並み。

2 首里城を復元せよ

首里城復元への沖縄県民の想い

当然のこととして沖縄文化の象徴を失った県民の失望は大きく、これをとり戻したいとする心情は計り知れないものがあり、それゆえに首里城の復元は戦後の大きな課題になっていった。このような状況下、一九五〇年代になると、旧琉球政府文化財保護委員会などによって戦災文化財の復元事業が開始され、「守礼の邦」という扁額を掲げた坊門、守礼門しゅれいもん（一九三三年〔昭和八〕国宝に指定、沖縄戦で焼失、[図4](#)）や第二尚王統しやうおうの菩提寺、円覚寺の総門（一九三三年国宝に指定、沖縄戦で焼失）など文化遺産の復元がおこなわれてきた。一九七二年の復帰後は、琉球大学の移転計画もあり、その跡地利用の計画が検討され、これらの検討をふまえて、やがて首里城跡の復元整備事業が復帰後本格的に推進されることになった。

文化財の復元に発掘は必要か

こうして復元への道がひらけたが、それからもさまざまな難関が待ちかまえていた。その一つが、文化財整備で重視されるはずの発掘調査のことである。

遺跡の整備や復元は、文化財の「真正性」を保つため慎重かつ綿密な調査研究と学術的な成果をふまえて実施されなければならない。遺跡本来の状態を正確に把握するため、遺跡復元の

前に綿密な発掘調査が実施されるのはそのためである。

ところが、こうした当たり前のことが、首里城の復元作業がはじまる一九七〇年代にはあまり周知されていなかった。首里城正殿の威容をよく知る前世代の人びとにとって首里城は沖縄文化のシンボルであり、その早期復元は悲願であった。

そうしたなか、正殿復元が実現へむけていよいよ動き出してくると、「正殿を一日でも早く復元してほしい」と主張する人びとのあいだから発掘調査の必要性はないとする声が聞かれるようになった。こうした声の多くは、発掘調査で時間と経費がかさみ正殿復元のチャンスが失われてしまうのではないかという懸念からであった。

またその一方では、「正殿の復元にあ



図4・復元された守礼門（首里城公園）

中国の額を掲げる門という意味の「牌楼」の流れをくむ建造物で、宮殿の前方路上や街路に建てられる装飾建築。中国皇帝の使者が来たときに「守礼之邦」の扁額を掲げたことから常時掲げられるようになった。尚清王代（1527～1555年）の創建、1933年（昭和8）国宝指定、沖縄戦で破壊されたあと1958年に復元され、今日に至る。